昭和 20 年 3 月 10 日

東京大空襲体験記

幸田里子

私の東京大空襲の体験を話す前に先に讀んだ新聞の記事の記憶を前述して始まる。

其の記事とは、昭和四十二年六月二日午前十一時頃、江東区深川門前仲町の地下鉄東西線工事現場で、作業員たちが、工事で痛んだ歩道を改修しようと掘りかえしていたところ、奇妙なものを発見した。

歩道の下、深さ一・五メートルほどの地下に防空壕らしい跡があり、そこに、まるでよりそうようにした人骨六体があった。

子供二体、大人四体で、男女はよくわからない、皆恐怖に耐えるかのようにうずくまり、うち大人の一体は、胸に二つの位牌を抱いている。

防空壕の中も猛火にさらされたとみられ、一体は焼けたあとがあり、遺体のそばには、さびた鉄カブト、くさった防火用のバケツが転がり、この発掘を見にきた近所の人たちに、昭和 20 年 3 月 10 日未明の東京下町大空襲を思い起させた。
22 年ぶりに発掘されたこの人骨六体は、はたして、どこのだれだったのだろう。

此の記事を見て戦後 30 年過ぎても、あの戦争は、まだ終わっていないんだと、あらためて思い起させ、戦争否定の決意の念をかたくする。

3 月 10 日 0 時 15 分空襲警報発令、それから約 2 時間半たらずの間に、死者八万八千名、傷者四万九千名、罹災者百万八千名、焼失した家屋は二十六万七千百七十軒、ことにその被害は主として、江東 0 メートル地帯に集中し、浅草区、深川区、本所区、城東区の四区は、殆ど全滅に近い決定的な大被害をうけた。

私の住んできた深川区などは、実に 100 パーセント一挙に消失してしまい、見渡すかぎり一望千里焼野原と化してしまった。

しかし、それ以上に忘れてならないのは、全都で死者 8 万から 10 万に及ぶ犠牲者を出し、関東大震災の東京市の 5 万 8 千名をはるかに上まわり、さらにのちの長崎はいふまでもなく、広島の原爆におとらぬ空前の大被害となったことである。

この夜襲来したB29は334機の大編体で、B29より投下された爆弾は、100キロ級6発、油脂焼夷弾は、45キロ級8545発、同2.8キロ級18万305発、エレクトロン焼夷弾1.77キロ級740発総重量約2000トンの焼夷弾を投下したのである。
　一平方メートルあたり、少なくとも三発以上といふ驚異的な焼夷弾の豪雨がふりそそいだことになる。

　その時私は20才だった。
中学校を卒業後、職につかないでいると、徴用で好むと好まざるとも、強制的に軍需工場で働くことを命じられるため、徴用される前に自分の意志できめた芝三田にある池貝鉄工に入り扇橋から毎日通勤していた。
　幸いにして3月10日未明の空襲の時は、家にいたため幸運であった。母と妹弟は空襲がはげしくなる以前、遠い縁故をたよって福島に疎開させていたため、東京には私と妹と父と三人で頑張っていた。
　なぜ、三人だけが東京に残ったかというと、私が出征間近と妹の卒業に近いことの二つの理由のためだった。少なくとも私が空襲より早く出征していれば、この日父を失わなくてすんだかも知れない。

　この日はまったく不幸にも北風の強い日だった。9日の正午頃から、どんより曇った空に北北西の強風が吹き荒れ、夕方から夜になると、それがいっそうはげしくなった。
　二、三日前に降った雪が町のあちこちに残り、路上を吹き荒れる突風は、さすように鋭い。9日夜10時半、東京の夜の町に、不気味な警戒警報のサイレンが鳴りひびいた。
　ひどい風だった。まっすぐ立っていられないほどの猛烈な北風だった。
　電柱の電線がうなり、ゴミ箱のふたが舞い上る、空襲にそなえて、貯水槽の氷を割る、なにしろ50年ぶりという以上な寒さだった。
　暗黒の室内は、ラジオの明かりだけがポツンと一つだけ浮いていて、刻々と情報を伝えてくる。

――――――
東部軍管区情報
昭和20年3月9日、22時30分警戒警報発令。
①南方上空ヨリ、敵ラシキ数目標、本土に近接シツツアリ。
②目下敵ラシキ不明目標ハ、房総方面ニ向ッテ北上シツツアリ
③敵ノ第一目標ハ、房総半島ヨリ本土ニ侵入シツツアリ。
④房総半島ヨリ侵入セル敵第一目標ハ、目下海岸線附近ニアリ。
⑤房総南部海岸ニアリシ敵第一目標ハ、反転南下シテ目下房総南部ニ在リ。
――――――

房総半島を旋回中だったB29は、房総南部から帝都に侵入したが、なんの被害もなく、そのまま機首をかえて「洋上ハルカニ遁走(とんそう)セリ」と。

東部軍管区情報はつたえた。「クリカエシマス」とラジオがいうのをきいて、私はやれやれと思った

その後わずかの時間、ウトウトとすると、突然ドッドッドッドッと地ひびきがする、一舜飛び起き、父と共に外に出ると、頭上にはB29が地上を圧するような勢いであらわれ、つぎつぎと火の手が上がってもはや手もほどこしようもない状態になった。

たちまち路上には、荷車やリヤカーと一諸に逃げまどう人びとがあふれ、みなわれ先にと避難するのに必死だった。

二、三軒おいた隣家にも油脂焼夷弾が落下、ガソリンをゼリー状にした油脂焼夷弾は軒であろうと屋根であろうと燃えながらベタベタと張りつきすぐ燃え出すので手がつけられない。

父が消火に現場へ飛び出した。私も父のあとについてバケツの水を持って消火にゆこうとすると、いきなり父にどなりつけられ、落ち合う場所は豊住町近くのかねさいの原だ、妹をつれて先に逃げろといわれ、フッと気がついて妹を見ると、驚きの余り放心状態の妹を見た。私は父に一諸に逃げようと言葉を返したが、父は生まれつき強性の性格のため聞き入れられず、やむなく非常持ち出しのリュックと多少の家財をリヤカーにつけ、それを自転車でひいて妹と共に父より一足早く父の指定した避難場所へ向った。

今思えば父はなぜ一諸に逃げなかったのか、理由は郡長という役をもっていたためと思う。

それは、たとえいかなる空襲があったにせよ、都民が都内から、その退去や避難することは「防空法」によってかたく禁じられていた。すなわち「防空法」の八条には「防空上必要アルトキワ・・・其ノ区域ヨリノ退去ヲ禁止又ハ制限スル」「必要アルトキワ・・・鉄道軌道航空機船舶車輛等ニ依ル人又ハ物件ノ移動ヲ禁止又ハ制限」し、この第八条の規定に違反した者は「一年以下ノ懲役又ハ八千円以下ノ罰金ニ処ス」と第十九条に規定している。

都民には、絶対に逃げることのできない防火義務が、法律として、頭の中にたたきこまれていたのである。

父の頭の中には、此の義務があったため私達と一諸に避難することが出来なかったのだろうと今になって述懐する。

やむなく父の命令で、自転車でリヤカーの荷を引き、妹をつれかねさいの原へ向かった。猛炎の壁を何度くぐりぬけたことか記憶にない。
烈風にのった火の粉が飛ぶ。その中には焼トタンが飛んでくる。そんなものにふれようものなら命はない。逃げる先の足もとにカッチン!!とすごい金属音カラカラカラと強風にとばされ転がってゆく、油脂焼夷弾の八角形の筒の弾体である。すぐ身近に逃げていた女の人の身体につきささり倒れる。即死である。
逃げているうちフッと頭に浮いた疑問が一ツあった。それは、なんでこんなに火が早く疎開道路を隔てた距離を飛び越して燃え移るのか。
父からわかれ逃げはじめた時、顔に冷たい霧雨のような液体がかかったことを思い出した。その時は避難するのに夢中なので忘れていたが、後でわかったことは、それはガソリンであった。

父に指定された場所のかねさいの原に近づいたが、もうすでに先に逃げた何千人かの群集がそのかねさいの原も猛火に追われて逃げもどってくるその群集に巻き込まれてしまった。
もうどうしようもない、父と再会の約束をしたが、この阿鼻叫喚の群集の中ではお互いにさがし合うのも不可能と考え、父とは別々の避難をし、運良く命があったら、焼跡で落ち合うと決断し、妹をつれ東陽公園から左へ砂町方面へ方向をきめ逃げる。現在はないが、左側に国鉄の汽車工場がある。そこまでくるともう何萬という避難者の群集で身動きが出来なくなってしまった。

もう荷物等にこだわっていると命を落とすと判断、非常持ち出しリュックと位牌の雑嚢だけ、妹には自分のリュックだけを背負わせ、後の荷物は全部捨てて、身体一つになって汽車工場の前から右の運河に向けて群集から困難して脱した。右に入った道路はすぐ運河にかかった木製の橋である。その橋も焼夷弾の直撃で燃え上がっていた、群集は橋が燃えているため渡れないでいる。私はまた決断した。生と死はいつも紙一重と腹をきめ、しぶる妹の手をガッチリとつかみ、その火の中を思い切りかけ出して橋を渡った。運がよかった。私達が渡ったあと幾ばくもなくして橋は燃え落ちたらしい。

今思い返せば、洲崎の海岸近くである。なんとか火を避け一夜を明かす。
頭上を見上げるとB29が二千メートル位までの低空で火災の炎の反射で機体を赤色にキラキラさせ、目で見た大きさで一メートル位の大きさに見えるほどの低空で、胴体の下の弾倉をバックリあけて、これでもかとバラバラバラバラと焼夷弾をまきちらしていた。

一夜を恐怖の中に明かし、煙でやられて痛む目を無理にあけ昨夜燃えだしていた橋までくると、はたしてもう橋はなかった。誰が渡したかわからないが浮いている筏に板を渡してあった。

妹の手をひき渡りはじめた、何気なく川の中を見ると信じられない、多勢の人が死んで川の中に沈んでいるのである。
やっとの思いで対岸に一歩渡ったとたん、驚愕のため足が地面に釘づけにされてしまった。
焼け落ちた橋のたもとには丁度マネキン人形を裸にして山に積み上げたように沢山の焼死体である。信じられない！信じられない！
しかし間違いなく現実である。
妹は「兄ちゃん恐いよう！」と恐怖の余り私にかじりついて来た。
とにかく我家も間違いなく燃えてないだろうが、我が家の焼跡へ、散乱する沢山の焼死体を避けて通る。

みちみちには、消防自動車に消防官が運転席でハンドルを持ったままの姿で焼死体となっている。また道ばたに、多くの死体の中に、母親が腹ばいになってその下に我が子だけは助けようと抱える姿のままの焼死体を見る。
これが戦争の悲劇かと新たな怒りにかられる。この光景は私の一生の間脳裏から離れないであろう。
全く一夜にして一望千里焼野原である。その当時は、電柱は木である。地上 30 センチほど残して灰である。燃えるものはすべて灰である。
工場の鉄骨は火災の熱でグニャリと曲がったまま、窓のふちにはとけたガラスがツララのようにたれ下がっている。
我が家の焼跡にたどりつく。残っているのは敷地内にポツンと焼けた金庫だけが立っているだけである。

その日、終日迄、父が焼跡にくるのを待つ、だが待つ父はとうとう来ない。
やむを得づ妹をつれ、つかれた身体を引きづるように江戸川東瑞江の叔父の處をたより、歩いていく。
翌日から、まさか父が死んでいるとは思えず、叔父から自転車を借り毎日、毎日二十日間罹災者の負傷者の収容所をたずね廻り父を探した。
だが幾ら探しても見つからない。

疎開先の母が心配で途中の交通を苦労して福島から私達のいる叔父の家迄くる。私は父が見つからない状況を母に報告する。母の心境を思うとつらくてたまらなかった。
家が焼失している現状では、いつまでも叔父の處にいるわけにもいかず母と共に疎開先の福島にゆく。空襲から二ヶ月後、用事のため上京の際、たまたま犠牲者を仮埋葬してある猿江の恩賜公園によってみる。父がやはり呼び寄せてくれたのか？あの日亡くなった人達をお参りしているうちに、ヒョイと父の墓標が目に飛びこんできた。

父を不幸にも亡くしてしまったが、多分水の中で亡くなってくれたのか、係員に問うと遺留品を渡してくれた。遺品は間違いなく父がもっていた雑嚢である。それでも父の死顔を見ていないからであろう、父が死んだという事実は信じられない。
三十三を過ぎた現在でも父が死んだという実感はない。

戦地で死んだ軍人は、戦死という名目に於て靖国神社に神としてまつられるが、内地で空襲で死んだ父を含めた多勢の非戦闘員には死んでも何もない、此のような不公平極まる處隅は、何とも腹だたしい限りである。

以上、思うままに書いてきたが、まだまだ書きたりないことも沢山あるが、あの 3 月 10 日の東京大空襲の事実の体験は人にふれられたくない心のきずとして私の一生消えることはないだろう。